

3 学校評価の在り方

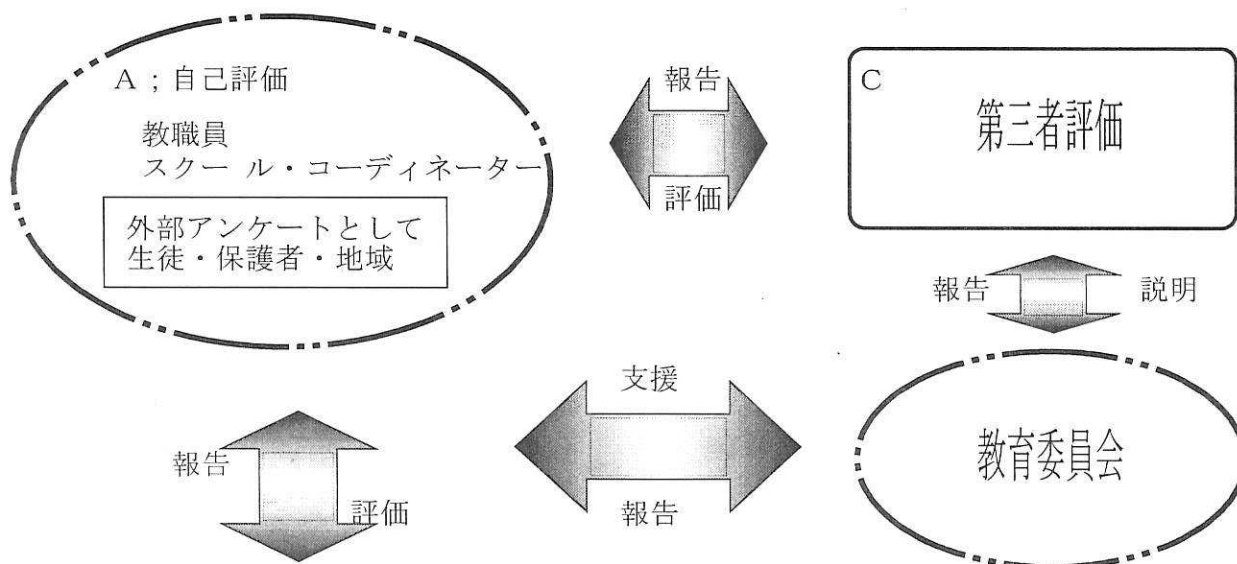
(1) 組織

伊藤 憲弘 (学校)	酒井ふさ子 (スクール・コーディネーター)
野口はるね (PTA 副会長)	福島 智恵子 (PTA 副会長)
新井 明美 (P 1 年学年代表)	小泉 初子 (P 2 年学年代表)
横田 美穂 (P 3 年学年代表)	作本 幸秋 (育成会)

(2) 実施計画

	日	時	内 容	場 所
1	6月 3日 (水)	15:00 ~ 17:00	①年間計画及び活動の趣旨確認 ②第1回調査内容の検討	図書室
2	6月10日 (木)	15:00 ~ 17:00	調査実施内容確認	図書室
	6月15日~19日 7月 3日 (水) 6日 (月)	学校公開週間 4校時	外部アンケート実施 ①生徒調査 ②保護者・地域に配布 13日 (月) 回収締め切り	
3	7月 8日 (月) 17日 (金)	15:00 ~ 17:00 15:30 ~	評価まとめ (始) 学校運営協議会提出・分析 ★学校関係者評価実施 第三者評価についての協議	特活室 CR
4	7月31日 (金)	14:00 ~	学校関係者評価提出 第三者評価実施要項提出	CR
5	8月10日 (水)	15:00 ~	①評価結果配布準備 ②保護者・地域 ③第三者評価実施内容確認	特活室
	9月11日 (金)	全 日	第三者評価実施予定日	
6	9月16日 (水)	15:05 ~ 16:30	校内研修会発表	CR
	10月15日 (木)		地域協働学校推進モデル校研究発表会	
7	11月19日 (木)	4校時	第2回学校評価実施 ①自己評価 ②学校関係者評価 回収締め切り27日 (金)	
8	12月22日 (月)		保護者・地域配布	
9	1月23日 (木)	15:00 ~ 17:00	平成22年度に向けて	図書室
10		15:30 ~	学校運営協議会提示	CR

(3) 四谷中学における学校評価の現状



B : 学校関係者評価

学校関係者評価委員会 = 学校運営協議会委員

本校では、学校関係者評価委員会を新たに組織することにかえて、学校運営協議会の既存の組織を活用して学校関係者評価委員会とし評価を実施することとした。

(4) 今年度の実践

学校が地域協働型へと転換する上で、学校・地域の両者に調和のとれた学校マネジメントが要求される。今年度の学校評価研究部は、昨年度の取り組みから学校・保護者・地域の三者の課題を整理し、教育環境の充実とさらなる具現化を目指すことになった。

平成21年度評価実施手順は、教職員等の自己評価及び生徒・保護者・地域の外部アンケートを資料として、問題点と改善点を明確にし今後の実践に役立てるものとし、同時に、それらの結果を学校運営協議会で報告・協議し、この組織を学校関係者評価委員会として活用することで学校関係者評価を進めることにした。また、昨年度懸案事項であった第三者による評価については、今年度9月に実施し、それぞれの評価結果を生かした評価システムの構築と確立を目指す。

① 昨年度との比較

昨年度の実践を踏まえ、評価システムの確認と評価の円滑な運営に努めた。今年度は、PTA副会長と各学年代表の4名を中心に、確かな学校評価への取組と評価結果の改善が円滑に進められるよう、機能性を高めるための人員構成を考え迅速に進めることができた。また、今年度の自己評価並びにアンケートの項目は、昨年度と同様に、次の5つの視点（ア. 学校

の教育目標、目指す生徒像について、イ. 学校生活について、ウ. 授業について、エ. 先生方について、オ. 学級経営について) から、生徒・保護者並びに地域・教職員の三者に、各項目内容を連動させた三者の意識を伺う内容として構成した。

② 活動の広がりと発展性（評価結果より抜粋）

特に重要な「学校での生活に精神的な安定感を得られ、安全に生活ができ、落ち着いて学習に取り組んでいるか」を問う、項目4、項目5、項目10に対しては、6割から8割の生徒が肯定している。逆に言えば2割から4割の生徒が否定しているということで残念な結果である。この3項目に関しては、肯定率100%を目指したい。

項目4. 学校の雰囲気はよく、楽しく落ち着いた学校生活を送っている。

	肯定群	否定群
第1学年	69%	31%
第2学年	80%	20%
第3学年	49%	51%

項目5. 学校の施設や設備の環境は充実し、安全に生活できている。

	肯定群	否定群
第1学年	73%	27%
第2学年	85%	15%
第3学年	59%	41%

項目10. 落ち着いた雰囲気です学習することができ、個々に対応してくれている。

	肯定群	否定群
第1学年	76%	24%
第2学年	75%	25%
第3学年	64%	36%

このことについては、教職員で協力し、生徒の間違った行いはきちんと指導し、教育相談や日々の生活の中で、生徒の意見や思いにしっかり寄り添っていくことによって、生徒と担任やその他の教員との人間関係は深まり、肯定群100%に近づいていくものと思われる。

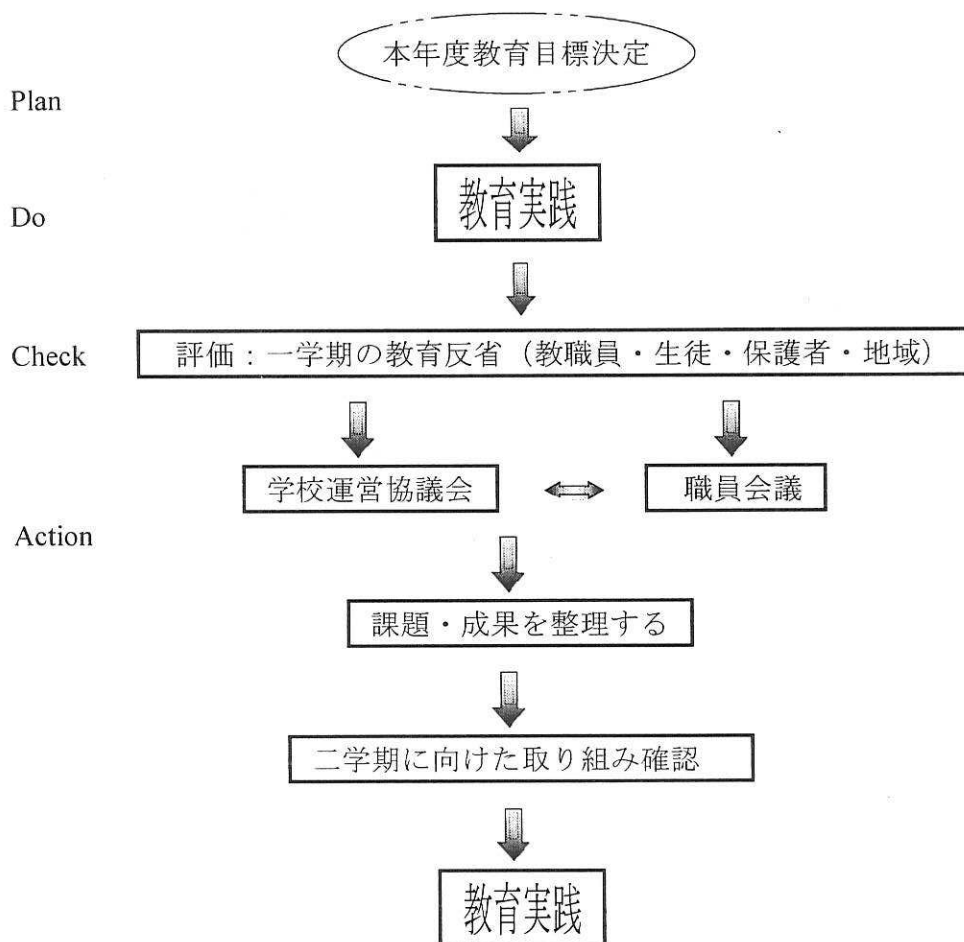
年度当初に共通理解する「生徒理解」「集団づくり」「授業の充実」「環境整備」を基盤として、「生徒の悩みや不安に耳を傾け、丁寧に、粘り強く関わることにより、生徒の抱えている課題の解決の支援に役立てる」ということを再度共通理解し、2学期の生徒指導にあたりたい。

(5) 成果と課題

① 成果

ア. 自己評価のPDCAサイクルの確立

下記のサイクルで二学期、三学期と取組のあり方を協議・検討しながら進める学校評価はあまりにも現実的ではないと思われる。しかし、これを可能にしたのは保護者・地域とのチームによる評価委員会である。人手を必要とする部分の補充やPTA役員と各学年代表の教育現場への参画と支援は教育環境の整備において重要と思われる。



イ. 学校関係者評価委員を、学校運営協議会委員で円滑に構成できたこと。

文部科学省の学校評価ガイドラインにある次の内容を受け、学校運営協議会委員に理解を求め、円滑に構成することができた。

- 学校関係者評価においては、その学校と直接に関係ある者を評価者とする事が適当であり、その際、児童生徒を基点に学校と密接な関わりを有する保護者が、学校評価とそれに通じた学校運営の改善に参画する事が重要である。このことから、その学校に在籍する児童生徒の保護者を評価者に加えることを基本とする。
- 学校関係者評価委員会を新たに組織することにかえて、学校評議員や学校運営協議会の既存の組織を活用して評価を行う事も考えられる。

ウ. 学校教育に対する信頼を維持し、高めるために実施する第三者評価.

「信頼される学校」づくりのための、生徒・保護者・地域住民への調査には、教育活動全般を数値で示し、改善された度合いが指標となる側面と、多様な学校への期待を掌握しつつ、その一つひとつに応える教職員の資質の向上や学校経営・運営等、学校教育に対する満足度で示される側面の二つがある。今年度は、自己評価を通じた数値による改善度とその推移を資料とし、その評価を学校関係者評価委員会により問題点と改善点の資料を作成、第三者による診断型評価を通して「信頼される学校」への一歩を踏み出した。

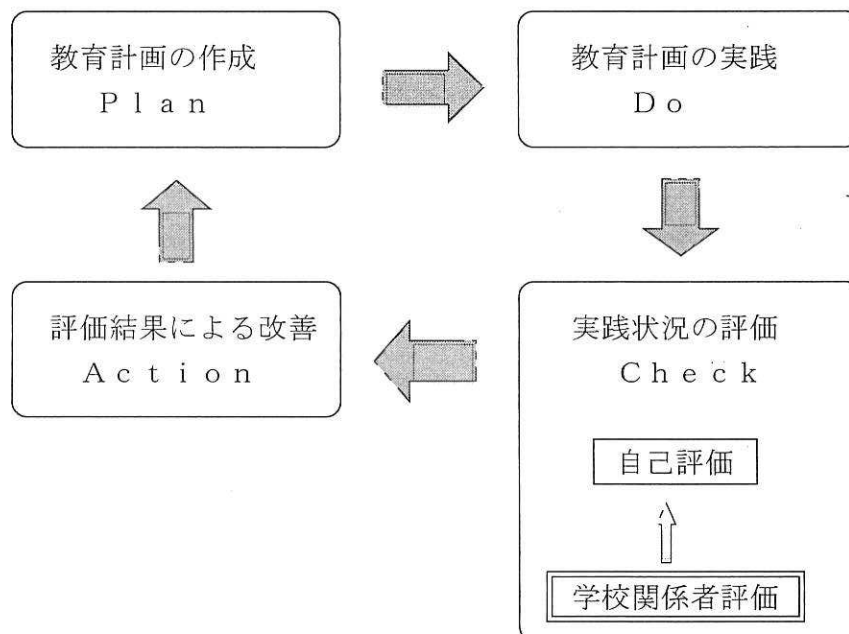
② 課題

ア. 自己評価の適切な実施

学校・学年に所属する教職員が、それぞれの重点的な取り組みの評価を、改善策が見いだせるように自己評価する事が重要である。また、この自己評価の客観性や透明性を高められるよう適切に実施したい。

イ. 学校関係者評価のPDCAサイクルの確立

目的1：評価活動を通じた、学校・保護者・地域住民の相互理解。
目的2：自己評価の客観性や透明性を高めるための評価。
目的3：保護者・地域住民の学校教育参画への仕組み



目的1～3を中心とした学校関係者評価は、PDCAのサイクルを通し、各種教育活動に生きて働くよう、計画的に推進することが重要である。

平成 21 年度 一学期 生徒アンケート

< %表示 >

4. とてもよくあてはまる 3. どちらかといえばあてはまる
2. どちらかといえばあてはまらない 1. まったくあてはまらない

- 1 先生方は、四谷中学校の教育目標や目指す生徒像等についてよく知らせてくれる。

	4	3	2	1
第1学年	27	54	15	4
第2学年	18	53	26	3
第3学年	16	53	26	5

- 2 学校教育目標や目指す生徒像等を意識して行動している。

	4	3	2	1
第1学年	18	49	25	8
第2学年	10	52	33	5
第3学年	10	46	34	10

- 3 生徒の思いや願い要望に応えた教育活動が展開されている。

	4	3	2	1
第1学年	17	47	32	4
第2学年	16	44	31	9
第3学年	17	42	31	10

- 4 学校の雰囲気はよく、楽しく落ち着いた学校生活を送っている。

	4	3	2	1
第1学年	29	40	25	6
第2学年	35	45	15	5
第3学年	13	36	42	9

- 5 学校の設備や施設的环境は充実し、安全に生活できる。

	4	3	2	1
第1学年	22	51	22	5
第2学年	29	56	12	3
第3学年	17	42	31	10

- 6 先生方は、保護者や来校者に対して、丁寧で誠実な対応をしている。

	4	3	2	1
第1学年	39	48	11	2
第2学年	34	50	14	2
第3学年	25	60	11	4

- 7 先生方の協力体制はよく、何事にも素早く対応してくれる。

	4	3	2	1
第1学年	29	47	22	2
第2学年	28	53	17	2
第3学年	19	44	29	8

- 8 学校行事には、積極的、協力的に臨み、得るものが多い。

	4	3	2	1
第1学年	36	52	10	2
第2学年	36	44	17	3
第3学年	32	45	15	8

- 9 授業が分かりやすいよう、いろいろと工夫してくれる。

	4	3	2	1
第1学年	38	46	14	2
第2学年	34	44	19	3
第3学年	18	57	21	4

- 10 落ち着いた雰囲気での学習ができ、個々に対応してくれる。

	4	3	2	1
第1学年	23	53	18	6
第2学年	20	55	18	7
第3学年	16	48	28	8

- 11 先生方は、いろいろな面から適切に評価してくれる。

	4	3	2	1
第1学年	24	55	19	2
第2学年	20	58	17	5
第3学年	23	44	28	5

- 12 7校時の時間は、とても有意義である。

	4	3	2	1
第1学年	12	42	27	19
第2学年	17	41	27	15
第3学年	13	37	28	22

- 13 TT、少人数授業は、学習活動を進める上でとても効果的である。

	4	3	2	1
第1学年	27	44	25	4
第2学年	29	48	15	8
第3学年	16	50	30	4

- 14 先生方は、悩みや意見をよく聞いてくれて、一緒に考えようとしてくれる。

	4	3	2	1
第1学年	27	48	21	4
第2学年	18	52	25	5
第3学年	17	53	20	10

- 15 先生方は、間違いや悪いことに対して、きちんと正しく指導してくれる。

	4	3	2	1
第1学年	44	43	12	1
第2学年	40	41	15	4
第3学年	26	45	24	5

- 16 担任の先生は、学級の様子を生徒や保護者に伝える工夫をしている。

	4	3	2	1
第1学年	26	56	15	3
第2学年	31	49	17	3
第3学年	24	53	16	7

- 17 担任の先生の学級作りの考えや方針がよく分かる。

	4	3	2	1
第1学年	26	56	15	3
第2学年	32	44	21	3
第3学年	23	45	24	8

- 18 学級は楽しく、まとまりもあり、担任の先生との信頼関係も深まっている。

	4	3	2	1
第1学年	25	47	25	3
第2学年	32	50	15	3
第3学年	19	43	31	7

- 19 地域の行事や活動、学校外でのボランティア活動に積極的に参加している。

	4	3	2	1
第1学年	25	36	30	9
第2学年	18	37	35	10
第3学年	15	44	23	18

- 20 道徳や学活などで、人間としての在り方や豊かな心の在り方について考える機会が多くある。

	4	3	2	1
第1学年	35	45	17	3
第2学年	22	50	24	4
第3学年	20	46	27	7

- 21 「四谷学」は、様々な活動が行われ、自ら課題を持って取り組むことができる。

	4	3	2	1
第1学年	24	54	17	5
第2学年	23	49	25	3
第3学年	16	49	22	13

- 22 朝学習や読書の時間は有意義である。

	4	3	2	1
第1学年	38	35	19	8
第2学年	32	40	15	13
第3学年	19	44	23	14

平成21年度 一学期 保護者アンケート

< %表示 >

4. とてもよくあてはまる 3. どちらかといえばあてはまる
2. どちらかといえばあてはまらない 1. まったくあてはまらない

1 学校は、教育目標や目指す生徒像等を分かりやすく伝えている。

	4	3	2	1
第1学年	28	63	9	0
第2学年	22	68	10	0
第3学年	23	64	13	0

2 学校教育目標や目指す生徒像等の具現化を積極的に図っている。

	4	3	2	1
第1学年	20	66	14	0
第2学年	26	64	9	1
第3学年	15	74	11	0

3 学校は、保護者、地域の思いや願いに応えた教育活動を展開している。

	4	3	2	1
第1学年	26	62	12	0
第2学年	26	70	4	0
第3学年	16	68	14	2

4 学校の雰囲気はよく、生徒達は明るくいいきいきとしている。

	4	3	2	1
第1学年	31	66	3	0
第2学年	31	64	5	0
第3学年	19	67	12	2

5 学校の環境は整備され、生徒達は安全に学校生活を送っている。

	4	3	2	1
第1学年	34	49	17	0
第2学年	34	62	3	1
第3学年	33	59	8	0

6 先生方は、生徒や保護者、来校者に対して、誠実な対応をしている。

	4	3	2	1
第1学年	28	63	9	0
第2学年	43	55	2	0
第3学年	42	47	11	0

7 先生方の協力体制はとれ、学校全体で生徒の指導に当たっている。

	4	3	2	1
第1学年	20	77	3	0
第2学年	35	57	8	0
第3学年	26	64	10	0

8 生徒の成長にとってプラスになるような学校行事が実施されている。

	4	3	2	1
第1学年	27	66	6	1
第2学年	47	48	5	0
第3学年	42	51	7	0

9 先生方は、授業を分かりやすくしたり、意欲的に取り組んだりできる工夫をしている。

	4	3	2	1
第1学年	16	78	6	0
第2学年	19	70	11	0
第3学年	13	74	13	0

10 落ち着いた雰囲気で行われ、生徒一人一人を大切にしている授業が進められている。

	4	3	2	1
第1学年	15	65	17	3
第2学年	15	68	17	0
第3学年	7	55	37	1

11 先生方は、学習への意欲や態度、努力、理解度など、様々な面から適切に評価している。

	4	3	2	1
第1学年	17	67	14	2
第2学年	26	67	7	0
第3学年	11	75	13	1

12 7校時の時間は充実しており、有意義である。

	4	3	2	1
第1学年	34	55	11	0
第2学年	44	55	1	0
第3学年	20	65	13	2

- 1 3 ティームティーチング、少人数授業は有効に機能しており、効果がでている。

	4	3	2	1
第1学年	26	62	8	4
第2学年	34	55	8	3
第3学年	16	67	17	0

- 1 4 先生方は、生徒との対話やふれあいを大切にしてくれている。

	4	3	2	1
第1学年	30	63	7	0
第2学年	37	59	4	0
第3学年	25	71	4	0

- 1 5 先生方は、生徒の間違った言動に対して厳しく、適切に指導してくれる。

	4	3	2	1
第1学年	26	59	15	0
第2学年	31	57	12	0
第3学年	25	63	12	0

- 1 6 学年・学級の様子について、通信の発行などでよく知ることができる。

	4	3	2	1
第1学年	21	65	12	2
第2学年	14	62	22	2
第3学年	5	59	31	5

- 1 7 担任の学級作りの考えや方針などがよく分かり、共感できる。

	4	3	2	1
第1学年	31	61	17	1
第2学年	29	58	13	0
第3学年	11	71	16	2

- 1 8 子どもは、楽しく充実した学校生活を過ごし、担任の先生との信頼関係もある。

	4	3	2	1
第1学年	33	58	9	0
第2学年	41	53	6	0
第3学年	32	60	8	0

- 1 9 学校は、生徒の地域での活動や行事への参加を積極的、協力的に推進している。

	4	3	2	1
第1学年	37	58	5	0
第2学年	40	51	9	0
第3学年	31	60	9	0

- 2 0 学校は、道徳等で人間としての在り方や豊かな心の在り方について考える機会を多く設けている。

	4	3	2	1
第1学年	37	58	5	0
第2学年	35	63	2	0
第3学年	19	70	11	0

- 2 1 「四谷学」では、様々な活動が行われ、自ら課題を持って取り組むよう適切に指導している。

	4	3	2	1
第1学年	33	63	2	2
第2学年	29	68	3	0
第3学年	19	74	4	3

- 2 2 学校は、小学校と連携し、学習内容の円滑な系統性を図っている。

	4	3	2	1
第1学年	29	57	14	0
第2学年	17	67	16	0
第3学年	15	71	14	0

平成21年度 一学期 教職員アンケート

< %表示 >

4. とてもよくあてはまる 3. どちらかといえばあてはまる
2. どちらかといえばあてはまらない 1. まったくあてはまらない

	項 目	評 価			
		4	3	2	1
1	学校の教育目標や目指す生徒像等を十分理解して保護者、生徒に伝えている。	27	73	0	0
2	学校教育目標や目指す生徒像等の実現に学級、学年、学校全体で積極的に取り組んでいる。	46	46	8	0
3	生徒や保護者、地域の思いや願い、要望に応えた教育活動を実践している。	34	58	8	0
4	学校が落ち着いた雰囲気、いきいきとした学校生活が送れるよう、教育活動全般にわたり、工夫、改善している。	17	58	25	0
5	校内の環境設備に気を配り、施設・設備の点検、修繕などが日常的に行われている。	25	57	8	8
6	保護者や来校者への対応や電話の対応など、丁寧に誠実に行われている。	50	42	8	0
7	教職員の協力体制がとれ、生徒指導等に素早く、組織的に対応している。	34	41	25	0
8	学校行事を生徒にとって魅力あるものにするために、工夫、改善している。	64	34	0	0
9	各教科の指導内容、指導方法、指導形態の工夫、改善に努めている。	25	75	0	0
10	生徒一人一人の個性や能力に応じて、指導の工夫、改善に努めている。	42	42	16	0
11	各教科の評価は、十分検討され、適切に行っている。	42	50	8	0
12	7校時の時間は、とても有意義である。	8	50	34	8
13	TT、少人数授業は効果的に機能し、成果も大きい。	25	50	17	8
14	生徒との対話やふれあいを大切に、好ましい人間関係づくりに努めている。	34	66	0	0
15	生徒の間違った言動については、決して曖昧にせず、適切に指導している。	34	58	8	0
16	学年・学級の様子について、保護者に平素からきちんと伝えている。	9	73	18	0
17	学級づくり、学級経営の考え方や方針は、具体的で分かりやすいものとなっている。	27	64	9	0
18	生徒との信頼関係に基づき、一人一人を大切に学級づくり、学級経営が進められている。	36	55	9	0
19	地域の行事や活動、学校外でのボランティア活動への参加を積極的に推進している。	25	58	17	0
20	道徳教育は、年間計画に基づき、道徳の時間を中心として計画的に進められている。	34	66	0	0
21	「四谷学」は、ねらいを明確にし、計画的・継続的に実践されている。	23	77	0	0
22	職員会議をはじめとする各種会議が円滑に運営され、有効に機能している。	17	75	8	0
23	校内研修は役立つ研修であり、充実した物になっている。	25	75	0	0
24	地域協働学校推進モデル校として、家庭・地域・幼稚園・小学校、関係機関等との連携が図られている	25	75	0	0

Ⅲ 研究のまとめ（提言）と今後の課題

これまで平成 20 年度、21 年度の 2 ヶ年にわたり、地域協働学校推進モデル校としての実践を積み上げて、新宿版コミュニティ・スクール「地域協働学校」を立ち上げるための課題と対応策を検討してきた。結果として言えることは、同じ新宿区といっても実施可能な地区とそうでない地区の差はあるものの、確かな手応えをもって「地域協働学校」が開設できるとの結論に至ったところである。

新宿区地域協働学校推進事業実施要綱に示された検討課題は、次の 3 点であった。

ア 学校運営協議会の在り方

イ 学校と地域（コミュニティ）との連携

ウ 学校評価の在り方

その後、平 21 年度に入って、新宿区の他の地区に一般化して展開をするための検討課題として次の 2 点が示された。

エ 四谷地区だからできたこと、逆に四谷地区だから難しかった点は何か。

オ 新宿区の他地区に一般化するにはどのようなことが必要か。

研究を推進するに当たっては、ア～ウの観点を横糸に、エ及びオの観点を縦糸にして総合的に検討した。

1 研究のまとめ（提言）

研究のまとめ（提言）は、次のとおりである。

(1) 学校運営協議会の在り方

- ① 学校運営協議会のメンバーの人選に当たっては、学校、家庭、地域それぞれほぼ同数とし、どの集団も単独過半数とならないようにする。学識経験者を加えても、上限は 20 名程度が妥当である。公募による委員を加えることは時代の趨勢ではあるが、第三者評価を実施し、大所高所からの分析・検討が得られる場合は、必ずしも必要ではない。四谷地区の場合は、多くの町会、関係団体があり公募委員は入る余地がなかった。
- ② 学校運営協議会委員の任期は 2 年とし、再任を妨げない。身分は非常勤の特別職とし、校長の推薦により教育委員会が委嘱するものとする。会長、副会長は委員の互選とし、会の進行、運営を担当する。
- ③ 学校運営協議会は地教行法 47 条 5 項に規定される職務権限を有しつつも、学校の教育活動の支援・援助に徹するという基本理念に基づいて活動する。主な所掌事項は経営方針、教育課程の編成の基本方針、教育活動計画、予算編成・執行、組織・編成、学校評価、学習指導・生徒指導、協働体制等の「承認」、人事案件についての「意見具申」等が挙げられる。
- ④ 学校運営協議会委員の推薦に当たっては、スクール・コーディネーター等、学校と家庭・地域を結び付ける連絡・調整役の援助が不可欠である。
- ⑤ 会合は、月 1 回程度とし、部会協議と全体協議によって具体的な審議を進めるものとする。会合に先だって、部会の担当者、学校関係者、副会長等による調整会議をもって具体的に煮詰めておくことと学校運営協議会そのものの協議が深まったものとなる。

(2) 学校と地域（コミュニティ）との連携

- ① 事業推進部は、21 年度は支援部、連携部、学校評価研究部の 3 部制として再発足させ、

機動的な活動ができるようにした。従来の学校支援、健全育成・安全、文化・スポーツ、学校評価研究の4つの事業部より業務内容も整理され、活動をスムーズに無駄なく機能的に進めることができた。学校運営協議会委員も各部に所属し、具体的な活動を担当していくことにより、学校運営協議会の進行がスムーズになった。

- ② 支援部の活動は、主として四谷学への援助、第7校時の数学の援助等であったが、概ね所期の目的を達成することができた。また、他の教科、例えば漢字検定への取組なども計画的に実施できた。人的な支援体制も、スクール・コーディネーターを核として町会の方々、保護者の協力により形成することができた。
- ③ ボランティア活動については、1年生を悉皆で担当させ、2・3年生には1年の時の経験を生かすということで希望制とした。1年生の場合、どのボランティアに参加するかは年間計画を予め示したのものをもとに希望による申告制とした。ボランティア活動ごとの人数の差はあるものの、スムーズに実施できた。2・3年生の中には、同じ活動に毎年参加する生徒も出てくるなど、多くの成果が得られた。また、今年度、道徳授業地区公開講座は、2学年において地域の方々による「職業講話」を実施し、職業倫理についての理解を深め、その延長線上で町会等の全面的支援による職場体験が実現できたのである。
- ④ まだ点レベルではあるが、町会等が主催する地域行事等への参加も果たせるようになり、本事業が都市型コミュニティ造り、町造りの一環として位置付き、保護者・地域住民と一体となった区民運動として展開していくための足がかりができたと考える。それは、学校が町の生涯学習の拠点として位置付き、そこに集う保護者や地域の方々、関係機関、教職員等が一丸となった活動こそ大切だからである。

(3) 学校評価の在り方

- ① 学校評価については、評価のPDCAを早めに設定するという事で、生徒・教職員・保護者による自己評価、学校運営協議会委員を対象とした学校関係者評価を1学期に設定し、その評価結果を2学期の計画や活動に生かしていくことを考え、保護者に集計等の処理を依頼して早めの集計ができたので2学期からの教育にその結果を生かすことができた。このことは、平成20・21年度の2ヶ年に亘って実施でき、結果を保護者等にフィードバックするとともに経年変化を探る資料とすることができた。
- ② 町会長等を対象にしたアンケート調査については、教職員や生徒と同じような選択肢によるアンケート調査をしても応えようがないだろうとということから、校長の学校経営方針を提示し、それを読んで文章で答えるという形態の調査を平成20年度に実施した。このことが有効に作用したのか、多くの具体的な意見・改善策が得られた。
- ③ 平成21年度については、9月に学識経験者等を数名依頼しての第三者評価を実施できた。文部科学省が示した「学校評価ガイドライン」も視野に入れつつ、区としてこの問題への対応策を策定するための資料を本校として作ることを区教委から依頼され、急遽入れた評価である。本来であれば、2学期の実践も加味して、3学期の2月頃に実施するのが筋である。
- ④ 第三者評価の実施に当たって活用したのは、生徒・保護者・教職員の自己評価結果、学校運営協議会委員による学校関係者評価、及び当日の教育活動の視察と関係者への聞き取り(ヒヤリング)、懇談等である。このことについては、研究発表会当日にサブ資料として情報提

供していく予定である。

2 今後の課題

2ヶ年に亘る地域協働学校推進モデル校としての取組を進めてきたが、今後さらに深めたり、取り組んでいく必要のあることは次の通りである。

- ① 地域協働学校は、その地にある保育園、幼稚園、小学校、中学校の全てが参画し、地域ぐるみで町造りの一環として実施するのが望ましいが、そのための条件整備をどのように進めていくか。
- ② 草創期の精神を如何に守り育てていくか、時が移り、人が変わっていったときに形骸化したしくみのみが残っていたのでは所期の目的を達成することができない。規則等に係わるものはもとより、それを生かした取組の具体例などを如何にして記録として残していくか。
- ③ 地教法47条5項に規定される職務権限は、使わなければならない規定ではなく、使うことができるとの規定である。法令を踏まえながらも、あくまでも学校教育を支援・援助していくとする新宿型コミュニティ・スクール「地域協働学校」として成熟させていくには、今後、どのような手立てが必要か。
- ④ この地域協働学校は、当初から全区展開を実施することは想定していない。しかしながら、実施可能な地域とそうでない地域との教育の質に差を生じさせないためには、何をどのように調整していく必要があるのか、今後、検討していく必要がある。
- ⑤ 事業部の内容は、さらに充実させていくことが期待されているが、まだ、現時点の取組では不十分である。今後、どのように内容・方法の改善・充実を図っていくか。
- ⑥ 既成の事業、町会等の事業、その他、地域総合型スポーツ文化クラブ等の活動との重なりを調整する必要性が必ず出て来ると考えられる。学校運営協議会を中心としてどのように連絡・調整を図っていくのか。
- ⑦ 第三者評価の導入については、今後、地域協働学校であるか否かに関係なく、全ての学校に導入されてくると思われる。客観的な評価結果が得られるということで、今後、各校の取組の継続・深化を図りながら確かな仕組み・制度としてどのように確立していくか、その方法の開発が課題である。
- ⑧ この事業は「地域の子どもは地域の人々、保護者、教職員の三者が共に連携して育てていく」との学校を基地とした総合的な活動へとシフトしていくと思われる。その時に、幼・保・小・中一貫教育、部活動や生涯学習・生涯スポーツ等の在り方をどうしていくのか。本事業の延長線上に必ず出てくる問題と考えられる。

以上、現時点で考えられるいくつかの課題を示したが、モデルなき取組でもあるので、今後新たな課題が各実践の過程で出てくると思われる。その場合には、その都度、関係者による協議を実施したり、多くの大人の叡智を結集して乗り切っていきたいと考える。おそらく、学校が存続する限り永遠の課題としてゴールの見えない取組になるのであろう。

教育とは、明治5年の学制発布以来、先に生まれた者が後から生まれた者に対して施す、息の長い継続的な取組なのである。地域という共通の基盤に立って、これからの教育の在り方を共に考え、共に語り合うそんな学校造りが求められているのである。新宿版コミュニティ・スクール「地域協働学校」の今後に期待したいと考える。

〈資料 1〉

平成 21 年度 新宿区立四谷中学校 学校運営協議会 議事録

第 1 回 平成 21 年 5 月 7 日 (木) 15 時 00 分～17 時 20 分 コミュニティルーム

(1) 出席者：葉養正明、望陀宣夫、吉川ゆり子、高山俊達、坂部健、関根修、田中健士
野口はるね、菊池里智子、木村信美、小倉利彦、篠田直樹、高橋英明、
酒井ふさ子、小林美佐子、谷合明雄、山本宣子、伊藤憲弘、長崎秀一、
伴場敏彦

(2) 議事

- ① 出席者紹介、委嘱状伝達、各委員自己紹介、校長挨拶、教育委員会挨拶
- ② 会長選出、葉養正明会長挨拶 副会長は高橋英明、望陀宣夫各委員
・地域協働学校推進モデル校は、学校、地域、家庭が連携していくこと。
- ③ 教委員会上原指導課長挨拶
・学校の応援団として協力する組織、委員構成は現在の 15 名でよいか、第三者評価の研究スタートをきって欲しい。
- ④ 学校経営方針について 校長
・平成 22 年度は 11 月頃に提案、地域協働学校推進モデル校は地域の特色、学校の特色を出していく。学力保証、進路保証をしていくことが重要。
- ⑤ 教育活動報告 協議
ア進路 都立志向が年々強まっている。受験らしい受験。公立を望む子多くなってきて良いことだ。子どもたちの特性にあったところを選べるよう指導、キャリア教育も含まれる、昨年 1 年生では地域の方のお話から人生設計を考える授業。2 年生では 20 歳位の自分をイメージしての職場体験。3 年生は高校進学指導等を実践。
イ生活 教育委員会への事故報告は 4 件、1 件は交通事故、3 件は校内での悪戯からの怪我、学校選択制で広い地域から生徒が集まる。外国籍の子も増える、言葉の面での支援が課題。通訳の配置、いじめへの対応、カウンセラー・ふれあいサポーターで対応
ウ教務 月 1 回地域の方々が意図的に関わられるようなプログラムを作成。5 月運動会、6 月ゴミゼロデー、6 月から 7 校時目の数学授業に外部支援者。7 月道徳授業地区公開講座、8 月職場体験、9 月セーフティー教室、10 月合唱コン、11、12 月は 7 校時の授業の充実。7 校時の使い方に関して教員の意識も高揚。オール 3、オール B 以上の学力の確保。小中連携の充実。
- ⑥ 今年度の活動の方向確認
・研究全体スケジュールの確認、今年度は 3 部会（支援部、連携部、学校評価研究部）で実施。新たに調整会議を設置。副会長職を 1 名追加で選出（望陀委員）
・協議会の各委員の方々にボランティア活動に参画して理解を深めて欲しい。
・新しい部会への所属を確認。（敬称略） 支援部：高山、坂部、小倉、酒井、山本、菊池、小林 連携部：望月、望陀、吉川、田中、木村 学校評価研究部：葉養、関根、高橋、篠

田、野口、谷合

- ・7月11日の道徳授業地区公開講座は、2年生の職場体験を前提とする内容、職場体験では100%四谷地区で受け入れて欲しい。
- ・広報活動に力を入れる。ホームページも更新できるようになった。第三者評価は試験的にでも入れていただきたい。
- ・次回は5月29日（金）16時00分から。

第2回 平成21年5月29日（金） 16時00分～17時20分 コミュニティルーム

(1) 出席者：望陀宣夫、吉川ゆり子、高山俊達、坂部健、関根修、田中健士

野口はるね、菊池里智子、篠田直樹、高橋英明、酒井ふさ子、小林美佐子、谷合明雄、山本宣子、伊藤憲弘、長崎秀一、伴場敏彦

石村康代統括指導主事

(2) 議事

① 高橋会長挨拶

- ・子どもたちを社会で、地域で育てることを常に念頭において精力的な会の実施を。

② 石村統括指導主事挨拶

- ・5月19日には区の推進委員会を立ち上げた。推進委員会と四谷中の学校運営協議会でキャッチボールの予定。学校運営協議会の在り方について推進委員会へ提出を依頼。

③ 部会会議

④ 各部会報告

ア支援部：数学学習支援ボランティアの予定は、1学期は2年生、2学期から全学年基礎クラスの支援に入る。3年生は受験対策を進路希望別クラスでやる。6/17新苑学級の田植えのお手伝い。6/2小中連携授業では支援者も授業を参観し分科会に出席する。他の支援も要望があれば実施。漢字検定の第1回は来週、第2回は10月。

6/6（土）の第1回漢字検定受験準備の勉強教室を開始、5月は3回実施。6/1から毎日、直前勉強教室を計画、今回は生徒41名受験予定。

イ連携部：職場体験活動の受け入れ先、調整中、四谷地域で探す。6/11の町会長連合会、商店連合会にも依頼。101名全員を30～35の事業所で受け入れてもらうことを目標。

7/11の道徳授業地区公開講座、2年生の四谷地域での職場体験を前提に、職業倫理について講演。様々な職種の方、保護者、学校運営協議会委員からも人選。

ウ学校評価研究部：「四谷中学校における学校評価の現状」と「平成21年度学校評価研究部年間計画」を参照。学校運営協議会委員の方々を学校関係者評価委員として自己評価、分析を依頼。自己評価と学校関係者評価で出された資料をもとに第三者評価を診断型で実施。3名の学識経験者を予定。学校評価はこの学校運営協議会の核心部分である。

⑤ 全体協議会

- ・学校運営協議会の委員の人選、他地区へ広めるため課題、区の推進委員会で検討し一般化する。
- ・人選は和歌山県の新宮市立光洋中学校を参考にし、各グループの代表者たち三分の一ずつ

の人選で単独過半数にならないようにした。実際の人選はスクール・コーディネーターのご助言をいただく。結果として18名のメンバー、会議が成立する人数として妥当か。

- ・公募制はあえて採用せず、利害が入る可能性がある。
- ・杉並区では区で公募し、それぞれに分配。学区の広い高校は、地域のもつ意味が異なり、公募ということはありません。
- ・学校運営協議会の成熟度の違いか、校長に意見を言える関係に非常に驚いた。高校では遠慮してなかなか言えない。
- ・公募制に関して、四谷は学校運営協議会が意志を持っていて、成熟度で判断すると受け止める。
- ・次回は6月18日(木)16時00分から。

第3回 平成21年6月18日(木) 16時00分～18時00分 図書室

- (1) 出席者：葉養正明、望陀宣夫、望月睦郎、高山俊達、坂部健、関根修、田中健士、野口はるね、菊池里智子、酒井ふさ子、小林美佐子、谷合明雄、山本宣子、伊藤憲弘、長崎秀一、伴場敏彦
石村康代統括指導主事

(2) 議事

① 望陀副会長挨拶

- ・同じ目線で話し合いたいので、着席のまま御発言を。

② 学校長挨拶

- ・15日に区の地域協働学校推進委員会が開催、その報告と配付資料の説明。
- ・資料1 地方教育行政法(抄)
第47条5に則るか、新宿区独自の委員会規則かで協議、報告書を出したい。
- ・資料2 他区の学校運営協議会設置状況一覧
北区、世田谷区、杉並区、足立区の委員の人数は20名以内、本校の18名は妥当か、委員の任命で杉並区のみ公募制の導入。承認事項は3～5項目。人事権とは採用任用に関する具申。本校は都のフリーエージェント制を希望、推進委員会で説明。
- ・資料3 コミュニティ・スクールの事業概要
- ・資料4、5 新宿区第一次実行計画
地域協働学校の設置は、新宿区長のマニフェストである。10月の研究発表会では目処をつけて提言していく必要がある。
- ・資料6 報告書のレジュメ
- ・各部会の後、全体会で地教行法47条5項の是非、研究報告書の構想について議論を。

③ 部会会議

④ 各部会報告

ア支援部 文理科目基礎の支援を検討、国語は漢検教室、数学は授業支援を実施。英語は未定だが、2学期から取り組む予定。支援部として学力向上、基礎学力の支援に的を絞り、今年度中に提案をまとめる。学校、地域、家庭の協力により基礎学力向上を目指すことは、

新宿区全体の学習環境の安定につながる。6/23(火)1年生「四谷の中に江戸を捜す」坂部委員のお話。「四谷学検定」を実施して、生徒がどれくらい四谷のことを理解しているか知りたい。

イ連携部 7/11(土)午後、道徳授業地区公開講座 講師6名設定中。 関根委員紹介のロータリー関係で2名、専門店宮内かばん店店主、コンビニエンスストア店主、保護者から1名、地域商店主1名を人選中。8/26~8/28 2年生の職場体験、受け入れ先に関して町会長連合会で依頼、多数の反応あり。1年生のボランティア活動では、7/7の七夕飾り、四六幼稚園の会、育成会の若葉デイケアセンターの納涼祭。学校の教職員も割り振られて体験の予定。体験して、意見を述べることによって参画する意識を高めてもらう。委員の方々も参加して活動の精度を上げるため検証していただきたい。

全区展開に向けては、町会長の御支援から商店会へ広げ、支援活動のグループを作る。中学校としての文化を築くことが重要。

ウ学校評価研究部 9/11 第三者評価を実施予定。6/26までに人選、次回7/17の学校運営協議会で実施要綱を提示する。実施に際してヒヤリング等、様々にあるので、委員の皆様にご協力を願いたい。10/15の研究発表の実施要項の案の検討。

⑤ 全体協議会

- ・協議の内容、人事権について意見聴取。
- ・今年度10クラスで教員の定数は15名、新苑は別に3名。来年度9クラスになる場合、教員1名減。現在、教員の教科ごとの割り振りは校長の構想に委ねられている。学校運営協議会が人事権を持つと、校長は翌年度の経営方針を早い段階で作成し、学校運営協議会に示して十分審議する時間を取る必要あり。人事に意見を述べる権利には責任が伴う。
- ・平成24年度新指導要領になれば教科増で確実に定員増。それまでは弾力的に運用。
- ・講師に関しては、授業を入れた上で、足りないところを講師という形になっている。部活の終わった6時半以降に採点や授業の準備をしているのが現状。
- ・人事に関しては、任命権者に対して職員の採用、任用に対して意見を述べることができる。地教行法47条の3項は、学校運営に関して基本的な方針を作成し、学校運営協議会の承認を得なければならない。地教行法の方が強い権限になる。
- ・地教行法の3項が承認権、学校運営協議会で一番大きな権限。全国で多様な学校運営協議会が発足している。そこで議論になるのが5,6項の人事権に関する項目。国会の委員会でも議論された。学校運営協議会から意見が出されたら、任命権者の教育委員会は最大限その意見を尊重し、従えないなら理由の説明義務が発生する。法律上は理事会組織の管理機関なので、そこまでの権限がある。欧米では当たり前のことで歴史があるがアジア圏では歴史がない。保護者には学校運営に参加する権利がなく、PTAを窓口とするしかなかった。校長と学校運営協議会が敵対していると問題が起こる。地域の皆さんが校長の応援団という視点に立てば、校長の意見を入れ込みながら前向きに生かしていける。
- ・運営方針を校長から解りやすく提示、保護者等の意見を取り入れて実施。
- ・人事権があると責任が重い。真剣にやろうという気になる。
- ・文科省の担当部署である教育制度改革室に指定要件について聞いたところ、法律に則って

やるようにとの答えしか出なかった。文言で入れて運用で実施も可。

- ・より良い形を作って行きたいという思いを、細目など何らかの形で残して欲しい。
- ・次回は7月17日（金）16時00分から。先に短く部会をしていただきたい。7月は7月31日にも開催。

第4回 平成21年7月17日（金） 16時00分～17時30分 コミュニティルーム

(1) 出席者：葉養正明、望陀宣夫、吉川ゆり子、高山俊達、坂部健、関根修、田中健士

野口はるね、菊池里智子、木村信美、小倉利彦、篠田直樹、高橋英明、

酒井ふさ子、小林美佐子、谷合明雄、山本宣子、伊藤憲弘、長崎秀一、

伴場敏彦

石村康代統括指導主事

(2) 議事

① 望陀副会長挨拶

- ・評価は利害が絡んだり、個人的な考えで評価してはいけないと思う。全体を見て言わなければいけないので非常に難しいことだ。

② 校長挨拶

- ・資料を基に区の地域協働学校推進委員会の報告をしたい。

- ・資料1 他地区の地教行法第47条の5項承認事項一覧

京都市や三木市はほとんど網羅、世田谷区は薄い。

- ・資料2、3 新宿区版を作る参考にして欲しい。

新宿区では、地教行法の47条5項を入れる意向か。人事権を入れても使うこともできるし、使わなくても良い。1年次の中間報告書が完成、今年度の研究はこの報告書にプラスしていく。

③ 部会会議

④ 各部会報告

ア支援部 夏休み、1年生の補習授業、英語、数学に学習支援を実施。非常勤講師の先生にも指導を依頼。漢検教室は第1回を終了、合格実績が上がらず。今後の検討課題。研究発表日の公開授業等の内容の検討、2年生は7校時の数学の基礎クラスで決定。報告書の四谷学は一覧表のようなまとめ方にする。

イ連携部 町連への働きかけで、職場体験では全員四谷で受け入れ可。道徳授業地区公開講座では、職業倫理を6名のゲストティーチャーで実施。ボランティア活動は年間8～10回が妥当な数。地域行事との連携では、育成会、地域センター、町連、商連等の団体での子どもたちの事業を整理の予定。学校が町連へ顔を出して欲しい。職場体験の新規受け入れ先は約20件で合計41件。受け入れ先に後日お礼をする、PTAも一緒に挨拶を、信頼して快く受け入れてくれる。

ウ学校評価研究部 平成21年度第1回学校関係者評価アンケートの依頼。2学期以降の改善の資料とする。9月11日の第三者評価実施日の資料にも使う。特に設問12、本校の特色である7校時の在り方について考察、改善点をご指摘戴きたい。

⑤ 全体協議会

- ・東京都に認定された地域協働学校の方が便利。
- ・難しくなるが、人事権についてはおおよそのコンセンサスは取りたい。
- ・資料 2、出雲市の人事案件に関する付則と岡山市の意見表明に関する付則を参考にして四谷版を作りたい。
- ・資料 1 *経営方針、教育課程の編成、組織編制、施設・設備、協働体制に○。
- ・資料 2 職員の採用、任用については、付則をつけて罷免を使わせないようにするべき。出雲市型で考える。*すべて○。
- ・資料 3 委員の公募については、反対、四谷地区には必要ない。*委員構成、校長、地域住民、保護者、学校関係者、学識関係者に○。指定期間は 2 年、校長の関与は「推薦するものとする」、任期は 2 年、再任は○、身分は特別職、会長は互選。
- ・次回は 7 月 31 日（金）15 時から。8 月は 6 日の予定から 10 日（月）15 時に変更。

第 5 回 平成 21 年 7 月 31 日（金） 15 時 00 分～17 時 00 分 コミュニティルーム

- (1) 出席者：葉養正明、望陀宣夫、高橋英明、高山俊達、坂部健、田中健士、野口はるね、木村信美、小倉利彦、酒井ふさ子、小林美佐子、谷合明雄、山本宣子、伊藤憲弘、長崎秀一、伴場敏彦

(2) 議事

① 望陀副会長挨拶

- ・本日は、報告書の原稿読み合わせ等、よろしくお願ひしたい。

② 学校長挨拶

- ・2 ヶ月後に研究発表、まとめの段階に入る。区の動きも活発化している。

③ 部会会議

④ 各部会報告

ア支援部 報告書の原稿チェックと 7 校時数学支援の検討。2 学期から 1 生年から 3 年生まで全学年で実施予定。支援者はどう考えて生徒に接していくかの意見交換を実施。

イ連携部 原稿のチェック。ボランティア活動は、2 学期発表会以降、来年度に向けて内容を精選。校内教職員メンバーとの連携パイプ役が重要。

ウ学校評価研究部 9 月 11 日の第三者評価実施要項（案）を作成。外部評価者 3 名はまだ未決定。聞き取り方法に課題がある。

⑤ 全体協議会

- ・資料 1 で固まってきた。B を基本としてきわめて A に近い案で、今後校長会、教育委員会に諮っていく。
- ・フリーエージェント制は希望通りの教員を確保できるのか。人事は、最終的には教育委員会の中で決められていく。
- ・地域協働学校は、学校と地域の関係性で全区展開するのは無理との意見がある。
- ・平成 23 年度までに 3 校指定される。積極的に希望する学校もあれば、無理と諦める学校も出てくる。一律にはいかない。小学校の校長会ではずっと人事権のない A 案で話し

てきた。

- ・私たちは良い先生を確保しようという前向きな使い方を考えている。
- ・学校運営協議会は監視する組織ではなく、一緒に作っていかうとするものである。

⑥ 教育活動報告

- ・道徳授業地区公開講座の実施報告書と若葉高齢者在宅サービスセンターの活動要項を資料とする。若葉サービスセンターのボランティアは3日間で毎日8名ずつの参加で、昨年より増えた。
- ・今年は中学生の参加人数が増え積極的に活動できた。
- ・1学期の生活指導報告は部外秘の資料として提出、4月～7月の間に2件のガラス破損あり。指導後弁済させた。7月、信濃町家庭支援センター所長とサポートチーム会議、児童民生委員との連絡相談会を実施した。
- ・ガラス破損は、年度始めに保護者に通知、1万円を上限とする弁済にした。

⑦ 発表会当日の検討

- ・研究発表会当日のスケジュール、2次案。1年生から3年生の研究授業として7校時30分の数学支援を見学、実践発表14:35～15:05の30分で各部10分となる、シンポジウム15:10～16:00で50分、16:00閉会では非常に厳しい。16:30ごろまでずれ込む可能性あり。シンポジウムのメンバーは次回8/10までに確定し、8/31までに顔合わせをしたい。
- ・シンポジウムのパネリスト、保護者代表は田中PTA会長にお願いする。地域代表は次回までに決める。

⑧ 葉養会長挨拶

- ・野村総合研究所の冊子、学校評価の好事例集を参考にして欲しい。自治体の事例が参考になる。文科省は学校評価のガイドライン作りを進め、9月中旬には最終的にまとまるはずだが、政治動向を眺めながらの状態である。
- ・運用規則が出来ても後は実際の運用でうまくやっていく。動かすのはそれぞれの学校運営協議会である。

その他

- ・シンポジウムのパネリスト、地域代表として坂部委員か高山委員、相談の上決定。
- ・第三者評価の外部評価者、金子前教育長と交渉中。
- ・第6回は8月10日(月)15時～、第7回は8月31日(月)15時～

第6回 平成21年8月10日(金) 15時00分～17時00分 コミュニティルーム

- (1) 出席者：望陀宣夫、吉川ゆり子、坂部健、関根修、田中健士、野口はるね、小倉利彦
酒井ふさ子、小林美佐子、谷合明雄、山本宣子、伊藤憲弘、長崎秀一、
伴場敏彦
上原一夫指導課長、石村康代統括指導主事

(2) 議事

- ① 望陀副会長挨拶

- ・行動することが一番、ネットを作らなければと思っている。
- ② 学校長挨拶
- ・2年間の研究も10/15の発表に向けて目処がたった。8/7の幹事校園長会で区の地域協働学校推進委員会の「案Bを基本としてきわめてAに近い案」を提起、教育委員会で審議の上、最終的には3学期までに管理運営規則の改定を経て、22年度1校、23年度1校順次増やしていく。
- ③ 全体協議会
- ア 学校評価について
- ・事例集の調査研究冊子の内容を資料1として編集。好事例とは、共通する22の特色が網羅されている学校である。
 - ・資料2は前回配付分の学校関係者評価に追加したもの。
 - ・22の特色3.にあるように区の教育ビジョンに則って四谷中を検証したい。
 - ・広報力がないので保護者にも伝わらない。周知することが課題である。
 - ・22の特色は絶対的なものではなく、考えるための参考。
 - ・支援部として7校時に力を発揮、この夏休みに勉強教室にも支援が入った。保護者には喜ばれているが、生徒、教員の半数に異議があるようだ。
 - ・7校時は教員全員で関わらざるを得ない。30分だが教員の負担は大きい。通常の授業以上に大変。地域の方が入るから基礎クラスはやっていける。
 - ・漢検教室に参加する生徒は一所懸命静かに集中してやっている。4時～5時半だが足りないくらい。内容を改善すれば興味を持つのでは。
 - ・四谷中の7校時の授業ということで全員参加。確かに難しいが学力の底上げ、学力向上のために3年目になるこの四谷中スタイルの確立が肝要。
 - ・1年生の社会科、47都道府県、30カ国、人名地名など覚えるため、ドリルを実施。
 - ・定期考査の結果を完全答案になるまで実施。何回もやらせた。漢字100問、英単語100問覚えさせて、結果として家庭学習時間が増えたケースもある。
 - ・生徒はそばで声かけしてくれる人がいるとやる気が起きている。
 - ・アンケートでは知らないのに書きようがないとの意見、数名のチームに半強制的に年数回学校を知ってもらい、評価してもらう方法もある。数値で表せるもの、表せないものがある。自己評価、学校関係者評価、第三者評価の3つを使って、計画、実践、評価、改善のサイクルを確立する。
 - ・年間3回のアンケートの取り方を検証。知らない人でも十分理解できる評価アンケートとは何か。
 - ・第三者評価については、3名の評価メンバーのうち2名が決定。葉養会長と金子前教育長、もう1名は検討中。ヒヤリング対象として学校運営協議会から望陀副会長、田中委員、酒井委員にお願いしたい。
- イ 研究発表会当日のスケジュールの流れについて
- ・シンポジウム 仮題「新宿区地域協働学校のめざすもの」でどうか。
 - ・学校と地域の垣根の払拭が重要。地域、学校の文化が作られていかなければならない。

- ・協働して子どもたちをどのように育てるか、それぞれの立場で話したら良い。
- ・研究発表会は教職員関係の参加が多いが、保護者、地域もたくさん参加してもらえるテーマを考えたい。
- ・子どもの育み、育ち、皆で支える仕組みに向けて話したい。
- ・家庭で親はじっくり向かい合っていないと感じた。子どもたちは愛に飢えている。もっと愛情を注いで欲しい。
- ・町会のラジオ体操に中学生が4名ほど参加。保護者も一緒に参加していたので、地域協働学校で地域の人たちが頑張っているから、保護者も学校に来るよう話した。
- ・保護者会へは、1年生の最初は多く出席、徐々に減少、顔ぶれは同じ。3年生で進路が保わると増加。受験がらみだと多くなる。
- ・出てこない親、関心のない親が相当数いて、その方々が問題。
- ・保護者だけではなく、地域にも関わってもらう努力が必要。
- ・スクール・コーディネーターは地域と学校のパイプ役として町連などに四谷中の情報を伝えて欲しい。
- ・シンポジウムは60分で5名なので、期待するものとすれ違わないよう目指すものをつにして、性格付けをしっかりとっておきたい。

④ その他

- ・報告書の奥付として委員の一言を載せたい。学校運営協議会に参加しての感想等、往復はがきを送るので返信いただきたい。
- ・学校運営協議会の委員経験者を顧問、相談役とするようにご検討いただきたい。葉養会長は国の機関の部長をなさっていてとても忙しい状況にある。ご退任後も顧問、相談役のようにして関わって欲しい。
- ・研究発表会で資料映像としてこの協議会の様子を流す予定。次回8/31の協議会ではビデオ撮影をする。第7回は8月31日（月）16時～

⑤ 教育委員会教育指導課 上原課長挨拶

- ・8/6（木）臨時の幹事校園長会、8/7（金）教育委員会で新宿版地域協働学校について話し合いがあった。地域の人にとっても何かメリットがなければ意義がない。重い権限や責任となると無理と認識している。人事権の問題も幅広く検討して、皆様にメリットがあるよう情報を提供していく。これからの1、2ヶ月が重要になってくる。

⑥ 石村統括指導主事

- ・今後、学校運営協議会委員にヒヤリングの実施。「去年、今年で意識が変わって来た点」、「学校評議委員との意識の差」等。参画意識の高さの原動力を分析して次に生かしたい。

〈資料2〉

学校運営委協議会委員 一言集

◇望陀 宣夫副会長

私は中学生の職場体験は学校と地域が具体的に繋がる最も良い一例と思います。ミニ・ミュンヘンのようにオリンピック施設を1ヶ月借り受けてまちづくりで職業体験するのと違い、今回のように既存の四谷地域全体で取り組めることを目的とした中学生の職場体験をサポートすることは大切であり、各町会で1、2名の四谷中学に思いのある方に参加していただき、保護者だけでなく、商店主・卒業生等、点ではなく面的広がりのある応援団組織を作ることが、いろいろな団体と協力し合いながら継続させることになると考える。また参加企業の意見の吸い上げ等を行い、事前連絡会等を開くことを望みたい。

◇高橋 英明副会長

これまでも四谷地区では人的にも物的にも豊かな学校支援が行われてきた。それが、コミュニティー・スクールという言葉で言い表されると何か異質のように感じられてしまいがちだが、本質は変わらないものと考えている。

ただほんの少し、組織的であったり、地域全体の意識がより高められたりということはあると思う。この研究を境に、これまでの四谷地区の積み重ねを基に、地域協働学校として一層の支援体制が作られることを願っている。

◇望月 睦郎 委員

四谷一丁目の町会長として、四谷中学校を見守ってきた。学校に限らず、外からの目を自らが持つことは難しい。その目の一つとなり、学校の一助となれば

嬉しい。この2年間、地域の子どもがどう成長を遂げてほしいかという地域の思いを伝え、地域がどう関わりながら四谷の地域協働学校を作っていけばよいのかともに考えたいとこの協議会に参加してきた。四谷一中から四谷中学校へと名称は変わっても地域は変わらず見守っている。子どもたちも変わった面もあるが変わらぬ姿もある。子どもたちのために地域・保護者・学校がどう力を合わせるか本論はまだこれから、とも感じている。

◇吉川ゆり子 委員

四谷地区「民生委員・児童委員」として活動しております。

社会（地域）全体で教育を支える必要性を痛感致しました。スポーツをとおして地域で頑張ってきた子どもたちが確実に中学校でもリーダーとして活躍している姿を拝見して嬉しくなりました。

地域の教育力が必要とされる現在、多くの保護者の皆さんとともに手を携えて取り組んでいきたいと思っております。

健全育成・安全分科会（連携部）に関わらせていただきました。地域の皆様の応援体制への熱い思いを感じました。

2年間有り難うございました。

◇高山 俊達 委員

四谷地域でも少子高齢化が進んでいます。地域文化の担い手である子どもたちの減少は、先人たちが築いてきた四谷の気風を減退させ、価値観が混然とした無秩序的な町に変質しようとしています。

四谷人にとって協働的な意識を共有できる「ふるさと」感を醸成することにより、豊かな意識を身につけられ、安定した気質を得られると考えています。

中学校の生活の中で、「ふるさと四谷」を学習することにより、地域愛、四谷愛が形成されることを期待しています。

◇坂部 健 委員

地域より学校運営協議会の活動に参加の坂部 健です。四谷中学校の学校運営協議会は谷合校長先生を中心とした先生方、コーディネーター、PTA役員、四谷地区の町会長等、毎回熱心に協議されていることに毎回感銘を受けると同時に、自分自身の向上に大いに役立っております。

私の関わった1年生への四谷学「四谷に残る江戸の人々の人情について」7校時の授業時間、生徒は熱心に聞き、また質問を受け、生徒の熱心さに感動しました。歴史ある我が街、四谷を学ぶことを学校の教育の一環とする、学校の方針を今後も続けてほしいと思います。

◇関根 修 委員

今度の協議会に参加して、地域と学校との関係が希薄になっていることが判明した。だからこそ、ロータリーの奉仕活動も再考する点もあるのではないか。一番重要な点は、中学生の要望にあった活動になっているかということを考えていきたい。

活動方針としては、地域が学校に対して何ができるかではなく、学校が地域に対して何を要望しているかを理解した上で決定していく必要があると思いました。

◇田中 健士 委員

学校運営協議会で地域協働学校の活動をしてみると学校が生徒のことで孤軍奮闘していることがわかりました。

本来は学校・保護者・地域が生徒を導き育てる役割をそれぞれに求められているのですが今はポテンシャルを発揮していません。

地域協働学校は学校・保護者・地域が生徒を導き育てる役割を考え直し、協力しあって次代を担う生徒たちの良い成長のための環境を整えることに意義がある

と思います。

◇野口はるね 委員

昨年より学校評価研究部会に所属し、地域協働学校推進事業に関わって参りました。学校評価部会では、生徒・教員・保護者・地域の方を対象にアンケートを実施し、皆様からの御意見、御要望をもとに学校と地域が協力し合ってより良い教育環境を作っていくための協議資料の作成とともに、より効果ある評価アンケートづくりを研究して参りました。

活動をとおして再認識したことは、皆様の子どもや学校に対する熱い思いこそが、より良い学校『四谷中』を築くと言うことです。たくさんの方に目を向けていただき、愛される学校作りのために、微力ではありますが、今後も活動に携わっていきたいと思います。

◇菊池里智子 委員

昨年度から学校運営協議会に入りました。1年目は何をして良いのか、手探りの状態でしたが、漢字検定教室は少しずつ実を結んできています。今年度は支援部という明確な部会になり、子どもたちと共に学力向上を目指して地域の方と保護者のボランティアの方々とは協力して活動したいと思います。

◇木村 信美 委員

平成20年度PTA会長をさせていただきました。PTA活動は3年間、ふれあいサポーター、水曜日子どもルーム他に関わって来ました。協議会委員の最初の1年間は何をしていいのかわからず、皆様の後をついて行くのが精一杯だった気がします。2年目になり、学校と地域がどのように交わって四谷中学校の土台を作ろうかと考えられるようになりました。旧四谷一中は私の母校であり、新四谷中学校では子どもも大変お世話になり感謝しております。親・子どもとも友人

が増えました。都心と思えない素晴らしい環境の下に学力も（一番ですが）さることながら健全な心を育ていける学校であることを強く思います。生徒のみならず、家庭・教職員・地域の連携が（小学校を含め）潤滑化されることを願います。

◇小倉 利彦 委員

以前PTA副会長をさせていただいておりました。四谷中の前身である四谷一中の卒業生です。今回、支援部として時に7校時の数学の取組に参加させていただきました。問題を解いたときの子どもの顔は生き生きとしており、地域のサポーターとして参加できたことを嬉しく思っております。また、私自身もよい経験をさせていただきました。今後、この地域協働学校としての活動に、より多くの地域の方が参加いただけることを切に願っております。

◇篠田 直樹 委員

高等学校（新宿高校）という立場から中学校の学校改革を拝見させていただいております。特に地域との協働による学校づくりに関しては、先駆的な内容であり、高校としても参考になります。

四谷中学校におかれましては、こうした改革をどんどん進められ、生徒の力を伸ばしていかれることを期待しております。なお、高校という立場からは「学習習慣の定着」ということが大きな課題です。様々なご努力の上に一層の学習習慣の定着と学力の向上が実現されますよう尽力させていただければと思っております。

◇小林美佐子 委員（事務局）

事務局で議事録を担当しました。学校運営協議会では毎回率直な議論がなされました。子どもたちの育みに力を合わせるため、学校、地域、PTAそれぞれの

立場、思いを尊重していくことが大切だと感じています。

支援部の活動では、主に漢検教室を担当しています。自ら漢字検定に挑むことで子どもたちに的確なアドバイスが出来るようになりました。地域協働学校とは大人も子どもも共に学ぶ場だと思っています。

◇酒井ふさ子 委員

スクール・コーディネーターは、地域の多様な教育資源を学校に導入することで子どもたちの学習活動や体験活動を充実させていくことなどの役割を担っています。

地域協働学校へ向けて支援部の活動をしています。「学力向上」への取組を柱として、学校と支援ボランティアが力を合わせて、「生徒の力をどう引き出していくか」、課題を共有して活動をしています。学校・地域・家庭の教育力を協働化することにより、教育環境の充実が図れると思っています。

◇山本宣子 委員

学校職員の立場、また事務局として2年間、学校運営協議会に関わらせていただきました。学校運営協議会の構成、その役割・権限と責任、それらを全うするための学校からの情報提供など、文部科学省調査校の研究を基に、より具体的に研究を進めることができました。組織と活動づくりから始め、会長のリードの下、教育委員会の助言と示唆、委員の皆様の力に励まされ、2年目からは加速度的に研究が深まりました。地域の皆様の後押しに感謝申し上げます。学校とは、本来地域協働学校であったのだ、と実感した2年間でした。

あ と が き

副会長 高橋 英明

時代の要請は、社会全体で教育を支える必要性を強めています。ここ最近、繰り返して指摘されている社会的課題の一つは、学校を中心に地域が総掛かりで教育力を向上させることです。地域の教育力が必要とされている現実には、ここ十数年来叫ばれ続けていますが、なかなか改善されない現状がありました。そうこうしているうちに、子ども達を取り巻く環境や子ども達が生きていく生活空間は、益々、複雑なものとなってきています。このような社会状況の中であって、四谷中学校が、地域と共にある学校、地域に信頼され、支えられる学校を目指して、地域協働学校推進モデル校として一步を踏み出したことは実に価値のあることだと思います。

元来、四谷地区は、PTAを中心とした八校会という組織があり、地域で子ども達の成長を見守るという高い意識をもった土地柄と伺っています。また、育成会や商店会、各町会等でも子ども達への関心が高く、応援体制の取り易い地域とも聞かされています。現代社会が必要とする、意味のある他者との出会いや触れ合いに溢れた地域社会が、この四谷の地域には十分に潜在しているものと思われまます。先ずは、その潜在能力が、この地域協働学校推進モデル校という取り組みにより、益々、顕在化され地域の誰もが教育活動に関われる社会づくりの原点になることを願っています。

さて、これまでも多くの方々に、特色ある教育活動を中心に総合的な学習の時間などでボランティアやゲストティーチャーとして関わっていただきました。これまでの学校は、多くが、学校の都合に合わせ、パートタイム的な関わりしか地域に求めてこなかったのが現状です。しかし、この地域協働学校の取り組みは、これまでの学校との関わり方を点とするならば、その関わりを線や面として捉え、一層広げ、持続し、深める役割を担っています。内容的にも、これまでのイベント的な扱いから脱皮し、学力向上を主眼としたコーディネートされた計画的な関わりを特徴としています。

この一年間、谷合校長を中心に、生徒の学力向上を目指して、地域協働学校推進モデル校として3つの分科会で取り組んできました。その成果は十分に表れているものと思いますが、今後、更に充実した地域協働学校推進モデル校を目指すためには、どうすれば教育支援人材の輪を広げることができるのか、教育支援人材が十分に機能する仕組みづくりはどのようにすればよいのか等々、まだまだ検討し改善していく必要があります。

誰もがみんな教育活動に関わる社会の構築というこの大きな命題に向かって、地域協働学校推進モデル校の名の下に、この四谷地域が一体となって取り組むことができるのか、課題はまだありますが、その責務は重大であると言えます。とは言え、四谷中学校のこの船出が羅針盤となり、地域で子どもを育てるといふ思いをこれまで以上に芽生えさせることができれば、この地域協働学校推進モデル校がコミュニティーに対して一石を投じる価値は十分にあるものと思います。

この四谷を愛する全ての人々と共に手を携えて、子どもたちの学力向上と健やかな成長に向け、これからも一緒になって進んでいきましょう。

◇学校運営協議会委員

(※平成20年度までの担当者はゴチック)

会 長	葉 養 正 明	副会長	高 橋 英 明
		副会長	望 陀 宣 夫
委 員	望 月 睦 郎	吉 川 ゆり子	高 山 俊 達
	坂 部 健	関 根 修	小 川 貴 裕
	田 中 健 士	野 口 はるね	菊 池 里智子
	木 村 信 美	小 倉 利 彦	篠 田 直 樹
	酒 井 ふさ子	小 林 美佐子	谷 合 明 雄
	山 本 宣 子		
事務局	堀 越 建 一	吉 澤 忠 司	

◇ 本研究に携わった教職員 (※平成20年度までの担当者はゴチック)

〈平成20年度〉

谷 合 明 雄	酒 井 ふさ子	(スクールコーディネーター)	
山 本 宣 子	伊 藤 憲 弘	長 崎 秀 一	小 林 伸 一
伴 場 敏 彦	飯 塚 光 司	伊 藤 江里子	井 上 恵津子
榎 本 江美子	岡 村 嘉 久	田 中 真 理	中 山 恵 美
名 和 大 輝	花 村 玲 子	原 久 二	松 友 聖 子
峯 尾 智 子	室 井 由 子	森 田 基 嗣	柳ヶ瀬 栄三郎
和 田 弘 文	氷 飽 玲 子	浜 名 健二朗	辻 愛
島 垣 悠 斗	堀 越 建 一	椎 名 三枝子	日 高 菜穂子
佐 竹 伸 一	佐々木 伴 子	大 内 和 年	笠 原 和 子
			(スクールカウンセラー)

〈平成21年度〉

樋 山 玲 子	前 田 俊 二	加 藤 暁 美	近 江 峰 子
鳥 居 千 恵	手 塚 葉 子	田 原 健 司	小 野 翼
荒 川 光 義	吉 澤 忠 司	代 蔵 吉 香	阿出川 廣 子
糸 長 俊 明	(区スクールカウンセラー)		

※表紙の絵は、特別展「江戸四宿」江戸四宿実行委員会 1994 P180, P181 より引用

発 行 日	平成21年10月15日
発 行・編 集	新宿区立四谷中学校 東京都新宿区四谷1-12
TEL	03(3358)3771
FAX	03(3358)3770
印 刷 所	鉄弘社 03(3351)7981

